

さいたま市シニア大学大宮校
第六期校友会

六班だより

2010年7月 第17号
編集・発行 岡村昭則

第六十回県展を鑑賞

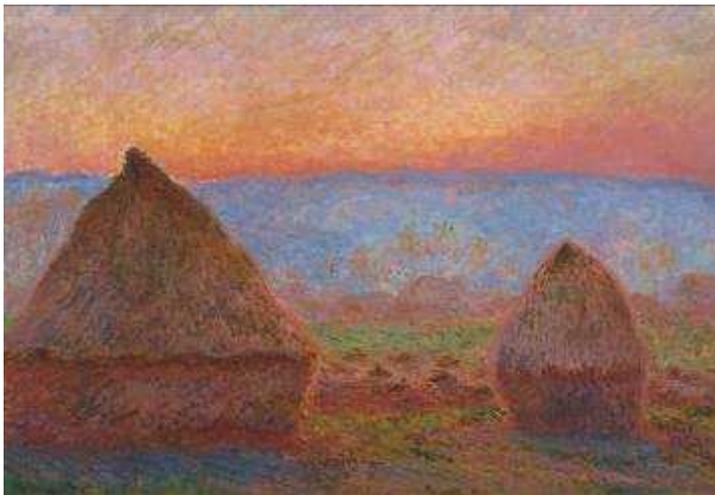
しました！

さいたま市シニアユニバーシティ大宮校六期校友会六班の班活動として、毎年6月は美術鑑賞と決まっている。これまでは上野や六本木などへ出掛けていたが、職員の中には健康がすぐれず体調不良の人もいることから、出来るだけ集まりやすい所にしようということになり、今年は大宮近辺で開くように心掛けて実施している。今回は昼食会を開いた後、埼玉県立近代美術館で開かれている第60回県展を鑑賞しようということになった。11時に北浦和駅に集まったのは11人中、9人が参加し

てくれた。残りの二人も病気で欠席も止む得ないことを考えるとこのパーセントに近い出席率になる。まずは腹ごしらえしてからということ、「りそな銀行本店」前のお店で全員が向かい合っている。ここで様々な情報が交換された。これから一年の班活動は美術鑑賞の後に行くことにして、昼食後、美術館へ向かった。

美術館は県展が開かれていることもあって、普段よりも賑わっている。とにかく館内の鑑賞は自由に見てもらうことにして、館内の喫茶室前に1時半に集合することにして、それぞれが自分の好みの会場へと向かった。私はMOMA Sコレクション常設展示室から見に行った。今回は22年度1回とあって所蔵作品の中で第一級品を展示している。ピカソの静物テーブルの上にある蝋燭や食器等は、面で捉えるキュービズムの手法であるが、まだ具象化の域にある作品で自分の部屋に飾っても誰がみても理解できる絵で落着きがある。解説を読むとこの作品は2000年の戦争中に描かれ、ピカソは戦後、自分は戦争を描かなかつ

たが、しかし、当時の私の絵の中には戦争があることは疑いない」と語っている。次に何と言っても、この美術館の一番の宝は、クロード・モネ「ジヴェルニーの積みわら、夕日」ではないだろうか。この作品を私も何回も見てきたが大気や光りに包まれてあらゆるものがのんびりとみえる。



「モネのもう一点は、私の好きな「ルエルの眺め」で、この作品を

みているだけでも、田園風景の中に水辺に映る樹木や空と釣糸を垂れる少年の瑞々しさ伝わってくる。この作品は何回見ても飽きない。日本人画家では寺内萬治郎の「裸婦」、「横臥裸婦」や「うずくまる裸婦」である。これらの作品を見ていると血の通う生身の熱気と躍動感を感じずにはいられない。アンドレ・ドランの「欲女」も力強いタッチで迫ってくる。寺内の作品と比較してみると、ドランの作品はどちらかと言えば、そこに女性の柔らかさを感じ取れないのは私だけであろうか。

第60回県展は、日本画163点、洋画525点、彫刻54点、工芸186点、書330点、写真488点計1740点が出品されている。特に工芸で私の近所の人が出品されているのか知りたかったので会場で探したり、目録を見たところないので入選しなかったのである。このように大勢の方が自分を表現する形で発表の機会をもてることは素晴らしいことだ。制作を続ける上でも励みなる。大量作品の鑑賞はじっくり見ず直感いく。次の作品が目についた。



鑑賞終了後、野外喫茶で打合せ会を開き、六班年度計画の予定を決めて散会した。

- 7月28日 暑気払い
- 9月29日 バスハイク
- 11月2日 クルージング
- 11月27日 忘年会
- 2月 国立演舞場



平成二十二年六月九日
主催 校友会連合会大宮校協議会
第一回学習会「今すぐできる
震災対策」

六期校友会の平成二十二年度学習会は八班が担当することになり、

第一回目を計画していましたところ、同時期に大宮校協議会(柿沼会長)として初めての学習会の開催を計画していましたので、それに便乗する形で六期校友会の皆様と呼びかけしました。今回の学習会は七期校友会が担当されともあつて、七期の参加者は四十二名と一番多く、六期の二十二名、五期の十五名、計七十九名の方々の参加を頂き、シーノの広い多目的ホールも満席でした。六班からの参加は私一人でした。

学習会の講師として、埼玉県危機管理防災部消防防災課の職員のご紹介があり、配布されたレジメに従って「今すぐできる震災対策」について、一時間半にわたって笑いを交えながら楽しく御指導をいただきました。

改めて今日の学習会の内容をかいつまんで今すぐできる震災対策の特徴と対策について紹介します。

日本は地震の巣

日本列島には、太平洋プレートとフィリピン海プレートかせ日本列島のある陸側のプレートに押し寄せているために強い圧力が掛かっている。そのために、日本は

世界でも有数の地震多発国になっていて、**世界で発生している地震の約一割が日本で起きている。**

南関東地域で発生した主な地震

- 1703年 元禄関東地震
- 1782年 天明小田原地震
- 1855年 安政江戸地震
- 1894年 東京地震
- 1923年 関東大震災
- 1924年 丹沢地震

南関東では、2〜3百年間隔で発生する関東大震災クラスの地震の間に、**マグニチュード7クラスの直下型地震が数回発生しています。**

現在も起こりうる状況です。

南関東地域地震活動の長期評価

- 南関東地域のどこかでマグニチュード7クラス地震が発生する確率。
- 今後10年 30%
- 今後30年 70%
- 今後50年 90%
- 阪神・淡路大震災における死者 5488人

自宅 4330人 78・9%

病院 551人 10%

診療所 21人 0・4%

その他 586人 10・7%

住宅の耐震化・家具の固定は特に重要

阪神・淡路大震災で倒壊した約10万5千棟の住宅の多くは、建築基準法の耐震基準が大幅に強化された昭和56年以前に建築されたものだった。

昭和56年以前に建てられた建物は、耐震診断を行い、必要に応じて耐震改修をすることが必要。

家具の転倒防止

寝室の地震対策

南地震が起きたらどうする？

- ・まずは身のおんぜんを。
- ・火の始末を。
- ・ドアや窓を開け、出口確保を。
- ・火が出たら素早く消火を。
- ・あわてて外に飛び出さない。
- ・室内のガラスの破片に気付ける。
- ・正しい地震情報の収集を。
- ・デパート等は係員の指示に従う
- ・エレベータでは最寄の階で下車
- ・乗り物の中では転倒防止。
- ・車の運転中は路肩に止める。
- ・屋外ではブロックに近づかない。

・海の側では高台に避難する。



校友会日帰りバスハイク

第一回準備打合せ会

六期校友会行事「日帰りバスハイク」は6班と9班が担当しますので、初めての打合せ会が中部公民館で開かれました。

- まず、六班の岡村が京王観光と西武バスに見積りさせた二案をベイスに検討し、次のことを決めて料金の安い西武バスに再度見積もりしてもらったことにしました。
- 一、実施日は9月29日
- 二、大宮発8時半帰着六時頃

三、行き先

- 富弘美術館、日光田母沢御用邸、工場見学、帰着
- 富弘美術館、沼田方面の果樹園、帰着

四、次回、打合せ6月21日、中部公民館9時半

校友会日帰りバスハイク

第二回準備打合せ会

今日は中部公民館で第二回目の準備会をひらきました。第一回目で検討したものに基づいて西武バスより取り寄せた見積りに基づき更に検討し、最終案を出した。

日光田母沢御用邸、輪王寺、昼食、キリン麦酒工場見学、帰着

これに基づいた見積りを出してもらうために、西武バスの担当者にきてもらった。そして我々の説明に基づいて計画をすすめてもらうことになった。

- 役割分担はつぎの通り
- 実行委員長 矢尾さん
- 副委員長と会計 藤森さん
- ビンゴ司会 桑原さん
- ビンゴ賞品担当 横田さん
- 池羽さん
- 計画及びチラシ作成担当 岡村

日帰りバスハイク終了後、6班

と9班で11月2日に反省会を行うことも決まりました。東京港クルージングを申し込みますが外れた場合も違う場所をセッティングは桑原さんがしてくれそうですので、皆さんも期待してふるってご参加下さい。

校友会日帰りバスハイク

六月役員会へ報告

二十三日に開かれる役員会へ9月29日に実施するバスハイクご案内を作成して、当日の朝、シニア大学事務局で印刷し、10時から開かれた役員会で実行委員長の矢尾さんに報告していただく共に、各班の担当者に持ち帰ってもらい班員に配布することを依頼しました。7月の理事会で参加人数が報告され、9月の理事会で各班の会費納入ということになりました。

出席している役員への反応もよくやはりガイドつきの見学がよいとの意見がみなさんからだされました。また、男性の方は最後にピール工場見学ににんまりの人が多く、みなさん今度の旅行には関心を寄せているように見受けられました。

高齢者の地域社会におけるライフスタイルに関する調査

(内閣府)について

岡村 昭則

「孤独死は身近」

4割超

全国の60歳以上の高齢者の4割強の人が孤独死を身近に感じていることが、4月2日の内閣府の発表でわかりました。単身世帯では、全体の3分の2にのぼっています。

本調査は、高齢者と地域社会・近隣との「つながり」（日常の付き合い、行事参加、緊急時の対応、生活支援など）の現状とニーズについて調査することにより、現在の地域における高齢者の実態と意識を把握し、今後の高齢社会対策の施策の推進に資することを目的としています。

調査結果

1 孤独死を身近に感じる人（非常に感じる、まあまあ感じるの合計）は42.9%

身近に感じる	42.9%
・非常に感じる	16.6%
・まあまあ感じる	26.3%
・あまり感じない	36.1%
・全く感じない	19.7%
・分からない	1.4%

- ・単身世帯の約3分の2（64.7%）が孤独死（誰にも看取られないこと）なく、亡くなったあとに発見される死を身近に感じている。大
- ・都市、中都市では、孤独死を身近に感じる人が5割近く、小都市、町村では約4割とやや少ない。
- ・男性では75歳、女性では88歳を過ぎると、「孤独死を身近に感じる」人の割合は約3割と、他の年齢層に比べて低くなる。一方、8代前半の女性では38.9%の人が孤独死を身近に感じている。
- ・健康状態が良くない人ほど「孤独死を身近に感じる」人が多く、「健康状態が良い」と回答した人で、孤独死を身近に感じる人は36.6%に対し、「健康状態が良くない」と回答した人では52.0%であった。

2

何らかの手助けやサービスを受けている人は、全体では10.9%

- ・健康状態が良くない人では24.7%。
- ・手助けやサービスが必要と感じているのに受けていない人は全体では3.6%
- ・健康状態が良くない人が受けている手助けやサービスは、「通院や送迎や外出の手助け」が77%、「話し相手や相談相手」が44.6%、「食事づくりや掃除・洗濯の手伝い」が44.5%、「ちよっとした買い物やゴミ出し」が44.0%であった。

3

地域の困っている高齢者の家庭に対して、現在、何らかの手助けをしている人は約割手助けをしたいと考えている人は約8割

- ・現在、地域の困っている高齢者の家庭に対して、何らかの手助けをしている人は20.0%。手助けの内容として、「安否確認の声かけ」が5.2%、「話し相手や相談相手」が2.3%。
- ・今後、地域の困っている高齢者の家庭に対し、手助けをしたいと思う人は80.3%。手助けの内容として、「安否確認の声かけ」が45.9%、「話し相手や相談相手」が35.6%、「急に具合が悪くなったときの手助け」が26.7%であった。
- ・一方、内閣府が同時に発表した「高齢者の日常生活に関する意識調査」では、「**将来の日常生活に不安を感じている人は72%に上り**、5年前から4ポイント増え、内閣府は現在の家計や健康への不安が、将来不安につながったと分析しています。」
- ・この調査の傾向は、私が役員をしている元職場の退職者会（会員千名超）の「**会員の生活実態調査**」でも同じでした。